

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 川 添 航 |
| 学位の種類 | 博 士 (理 学) |
| 学位記番号 | 博 甲 第 10288 号 |
| 学位授与年月日 | 令 和 4 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 審査研究科 | 生命環境科学研究科 |
| 学位論文題目 | Geographical Study of Religious Activities and their Roles in the International Migration Processes: A Case Study of Christian Church in Japan and the Republic of Korea (国際移住過程における宗教活動の役割に関する地理学的研究 —日本および韓国におけるキリスト教会を事例に—) |
| 主査 | 筑波大学教授 博士(理学) 松 井 圭 介 |
| 副査 | 筑波大学教授 Ph.D. 呉 羽 正 昭 |
| 副査 | 筑波大学教授 博士(理学) 堤 純 |
| 副査 | 筑波大学助教 博士(理学) 久 保 倫 子 |

論 文 の 要 旨

国際移住が拡大・多様化し、国際移住者のホスト社会への適応やコミュニティ活動の重要性が議論される中で、宗教活動が有する役割やその独自性についての分析が課題とされている。先行研究では、宗教活動を通じ社会関係資本が創出され、またトランスナショナルなエスニック・アイデンティティが維持されるなど、宗教活動には多様な役割が備わっている点が指摘されてきた。一方で、移住者の社会属性や移住経緯などの個別性との関係は未だ十分な検討がなされていない。著者はこの点に着目し、本研究では多様化する国際移住における宗教の役割を明らかにするため、ローカルなホスト社会での個別移住者の移住過程や日常生活と宗教施設への訪問・定着との関係に着目し宗教活動の分析を行った。著者は、研究対象として 1990 年代以降国際移住者の包摂に先駆的に関与していることに留意し、日本国におけるカトリック教会と大韓民国（韓国）におけるプロテスタント教会を選定した。その際に、東アジアでの「生産志向型移住」の多様化と「消費志向型移住」の拡大を踏まえ、それぞれフィリピン人移住者と日本人移住者を事例として宗教活動の実態分析を行った。現地調査は 2017 年 12 月から 2020 年 2 月にかけて実施された。著者は、単独で宗教者に対して宗教組織の活動内容や沿革についての聞き取り調査を行うとともに、キリスト教会での参与観察を実施した。現地調査においては、キリスト教会に訪問する信者に対して移住経緯や日常生活、宗教活動についての半構造化インタビューを実施し、データを得た。

本研究により著者が指摘した新たな知見は以下の 3 点である。第一に、国際移住の拡大・多様化により、日本および韓国では次第にそれぞれの社会属性や在留事由に対応したコミュニティ活動の拠点となる施設が求められていったこと、その一方で、生産指向型移住者であるフィリピン人移住者の場合、移住システムを背景とした流入経緯から移住先地域でのエスニック団体の活動は低調であったことが指摘された。第二に、消費指向型移住者である日本人移住者の場合、在留事由の多様化により複数のエスニック団体が並立し、移住者個人の選択性が強調されていたことが指摘された。第三に、以上の状況のもと、移住志向の多様化の中でもコミュニティ活動に対する需要は存在しており、宗教施設はその拠点として機能していたこと、また他のエスニック団体と比較して宗教施設は継続的な訪問・活動参加が可能であり、移住者は宗教施設への訪問・定着を通じた対面接触により社会関係の構築を推進していたことが指摘された。これらの 3 点から著者は、エスニック集団のコミュニティ活動が社会属性により分断される状況の中で、宗教施設が多様な社会的背景を有する移住者の結節点・帰属先となっていたと解釈した。以上得られた知見から、著者は国際移住者の継続的な宗教施設への訪問により、宗教活動には文化的・社会的役割が付与され、様々な目的意識を持った移

住者が緩やかに結びついたコミュニティが形成されたこと、また母国語での宗教活動や移住者どうしのコミュニケーションを通じ、日常生活の中でエスニックな要素との結びつきが維持されていたことを実証的に明らかにしたと結論付けている。

審 査 の 要 旨

国際移住現象の拡大やその多様化を背景に、国際移住者のコミュニティ活動の様態やその役割の分析が不可欠となっている。本研究は、国際移住者のコミュニティ活動に関する地理学的研究の中で等閑視されてきた存在である宗教を対象とし、宗教活動の役割がどのような社会的・文化的背景から形成されてきたのか、またその特徴についてキリスト教会を事例とした調査を通じ明らかにすることに成功したといえる。

本研究の意義として特筆されるのは、以下の2点である。第一に、本研究において著者は、国際移住の地域的な動向の変化にそれぞれの宗教施設がどのように対応し、活動内容を拡大・転換させてきたのかを分析し、さらに個別の移住者の宗教的背景や移住過程、日常生活との関わりから、宗教施設への訪問・定着過程や要因を解明した点である。従来宗教地理学では、宗教施設が主たる分析対象であり、個別信者は施設に対して従属的な存在として位置づけられ議論される傾向がみられるが、著者は本研究において、宗教施設を利用する個別の移住者や地域社会をめぐる変化についても分析を行い、移住者の移住過程や生活様式が宗教施設への訪問・定着や宗教活動の役割と相互に影響していた点を明らかにした。ホスト社会において移住者が抱える課題と宗教活動の相互の関係性を明らかにし、拡大・多様化する国際移住者の日常生活や社会関係において宗教がどのような位置づけにあるのかという点を議論したという点で高く評価できる。

第二に、研究の着眼点および研究手法が指摘される。本研究で著者は、国際移住者の移住過程や移住先地域での生活様式の多様性を踏まえコミュニティ活動を分析する視点と方法を示したこと、また、日本と韓国のキリスト教会での綿密なフィールドワークから個別の国際移住者のライフヒストリーや宗教意識に関わるデータを収集し、宗教活動の役割を実証的に解明した点で高く評価される内容を有している。

以上の成果は、日本の宗教地理学やその隣接領域の発展に貢献するものであり、多文化社会へと移行する東アジア地域社会において、宗教の社会的・文化的意義を議論する上でも重要な研究と位置づけられる。以上の理由から、本研究は博士論文として十分な価値をもつものとして評価できる。

令和4年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。